自転車旅行の今昔

大津　隆文

十月中旬、シンガポールに住む次女一家が来宅した。婿のポールはこの機会に、丁度来日中の友人（上海在住）との、日本でのサイクリング旅行を計画してきた様子。自転車をどうするかと思ったら、シンガポールから日本のレンタル会社に依頼済みの由で、一家が到着した日に注文の自転車が届いた。組み立て方を説明している中年の男性に挨拶すると、最近は客の七、八割が外国人で、自分もブロークンでもこうして英語で説明しないと商売になりません、とのことだった。

行き先は大阪方面、行ける所まで行って新幹線で戻る自由なプラン、キャンプも出来るようにテントと寝袋も携え、嬉しそうに出かけていった。毎日連絡が入り、鎌倉、御殿場、沼津、御前崎、浜松、豊橋と一週間、四六九キロ走って帰ってきた。

日本語はほとんど出来ない二人だが、スマホのお蔭で大したトラブルもなかったようだ。キャンプは一回だけであとはホテル泊、飲み屋も温泉も楽しんだらしい。本当に便利な世の中になったものだ。

そう言えば自分も大昔自転車旅行をしたことがある。

最初は高校時代の夏休み、中学時代の友人四人で名古屋から愛知県を一周した。自転車は日常用で、当時は道路も砂利道が多くタイヤの空気が抜けたりするので空気入れを携行、宿泊はぶっつけで小中学校の当直室に頼む予定とし蚊帳も用意、食事は飯盒炊さん用に米と缶詰を持参と、本当に貧乏旅行だった。それでも三泊四日、無事帰って来られたのだから、牧歌的な時代でもあった。

二度目は大学時代の春休み、親友と二人で名古屋から奈良まで出かけた。印象に残っているのは、初日に鈴鹿峠が急坂な上、向かい風が強烈なためへたり込んでしまったこと。途中で日は暮れるし道もよく分からず、路傍の藁小屋で仮眠をとったりし、奈良に着いたのは夜明けだった。この時の宿泊先は奈良学芸大学の学生寮、帰省中の学生の空いているベッドを使わせてもらった。滞在中は自転車で気ままにお寺巡り、これは真に楽しかった。